

さつま × しごと

Vol.04



やました しょうた
山下 翔大 さん (31)

宮之城屋地区出身。薩摩中央高校から福岡の大学へ進学。卒業後は保険会社に就職し、事故の損害調査を行うアジャスターに従事。鹿児島支社に勤めていた際には、家業を手伝いつつ実家から通勤。今年2月に跡を継ぎ、現在は妻と8か月の長男との3人暮らし。



飴職人

山下 翔大

▼県内でも4つの製菓会社しか製造していない「いも飴」。宮之城屋地区にある創業72年の老舗製菓会社、有限会社山下製菓も数少ない製造元の1つです。柔らかく優しい味のいも飴をはじめ、ニツキ玉やしょうが飴などを、家族5人で製造から梱包、発送まで行っています。

▼同社の3代目として今年2月に跡を継いだのが山下翔大さん。元々は保険会社に勤めていましたが、大分県への異動を機にUターンを決意。父からは跡を継がなくていいと言われていたのですが「さつま町が好きだったこと、自分がいないと山下製菓の味が途絶えてしまうから」と8年間勤めていた会社を退職し、故郷に帰ってきました。

▼中学生のときから家業を手伝っていた山下さんですが、飴を均一に伸ばしたり食感が良いタイミングを見計らったりするには、経験を積み感覚をつかんでいくしかないそうです。「流れ作業に思われがちですが、季節によって温度を管理し、食べた時に一番良い食感になるようにしています。小さい規模だからできるこだわりです」と胸を張ります。将来の目標を尋ねると「創業当時の作り方を受け継いで、山下製菓の味を守り続けたいです。コロナで土産物屋さんの売り上げが落ち込んでるので、

これまでしていなかった小売りも考えています」と話します。

▼進学や就職で故郷を離れるたびにさつま町の良さを感じたという山下さんは、町への人一倍熱い想いを持っていきます。「小さい頃、父親の後をついて行きたびに出会った人から優しくしてもらいました。この人たちに恩返しをしないといけないと思っていましたね。人口がどんどん減る中、できることを自分たち世代も考えないといけないです」と話す山下さんは、祖父と父から伝統の味とともに地域への熱い想いも受け継いでいます。

飴の角を取る機械。優しい口当たりにするために多くの手間が掛かっています。



消防団にも所属する山下さん。昨年10月に生まれた皇落ちゃんと。